

あかね色の空

【中学校第二、三学年】

「『平和』や『戦争』という言葉聞いて、どんなことが思い浮かぶかな。」という先生の問いかけ。

幸手市では、中学三年生になると平和について学び、作文を書く学習を進めている。作文が入選した生徒は広島に行つて、平和の式典に参加することができる。私は考えただけで興奮してきた。広島のしまなみ海道の景色も見てみたいし、純粹に選ばれたと思った。先生の問いかけの後、みんながそれぞれ自分の意見を話し始めた。

「『平和』って、戦争がない世界のことじゃないかな。」

「おじいちゃんやおばあちゃんから戦争の話聞いたことがあるな。今の時代とは違って、物がなくて大変だったみたいなんだ。」

「今は逆に恵まれているというか、物があふれていて、便利な世の中だよな。」

私は戦争体験のある祖父の話を子どものころ聞いたことがあったが、今ではよく覚えていない。先生はみんなの意見を聞いた後、真剣なまなざしで私たちを見て、話を始めた。

「実は、みんなと年の変わらない子どもたちにも、戦争の影響があったんだよ。」

考えてもいなかった言葉を聞いて、私は自然と背筋を伸ばしていた。

先生は話を続けた。

「『学童疎開』という言葉聞いたことがあるかな。太平洋戦争の時に、都会から親と離れて小学校三年生から六年生の児童二百八十人が、この幸手に避難してきたんだよ」

「えっ、この幸手に。どうして、親と離れなければならなかったんですか。」

「当時東京は空襲があつて、命の危険にさらされる状況が続いていたんだね。そこから子どもだけでも避難させようと疎開が行われたんだ。」

この幸手市にも疎開してきた子どもたちがいたなんて、初めて聞くことだった。

「幸手市郷土資料館に当時の貴重な資料があるみたいだよ。行って見たらどうかね。」

「ねえ、咲ちゃん、一緒に行ってみない。平和の作文を書くヒントが見つかるかなと思っっているんだけど。私は親友の咲ちゃんを誘ってみた。」

「いいよ。土曜日に部活が終わったら行ってみよう。」

部活動が終わった後、私たちは郷土資料館に自転車を走らせ、館長さんのお話を聞くことができた。

「学童疎開をした児童たちは、幸手の聖福寺、正福寺、担景寺、宝昌寺、朝萬旅館で生活していたんです。『幸手町のかたりべ』という音声が残っているので、聞いてみますか。」

その音声から、当時の様子を、低い声で語る女性の声が部屋に響いた。女性の声には、感情がこもっていて、どこもなく悲し気にも聞こえた。私たちは、次はどうなるのだろうという気持ちにかきたてられながら『幸手町のかたりべ』を聞きすすめていった。低い女性の声は、学童疎開してきた子どもたちの様子を語っている。子どもたちが教室に入れなかった理由の一つは、貧しくてお弁当をもってこらなかつたということ。工場まで自転車で一時間かかる道をこいで行き、働いても、働いても苦しい生活を強いられていたこと。みんないつかは故郷に

帰って親に会えることを信じていたが親は戦死して二度と会うことはなかったこと……。

当時の小学生たちの様子が私の頭の中に、白黒の絵となって入ってくる。その絵は、私の頭の中にしばらくとどまりつづけた。

ふと、隣にいる咲ちゃんを見ると、咲ちゃんの肩が震えていた。

「咲ちゃん、どうしたの。」

「なんだか、胸が苦しくなっちゃって。」

そう言いながら、咲ちゃんのほおには涙が流れていた。

私は咲ちゃんの涙のわけがどことなく分かっていった。

「私たちはその頃の子どもたちに比べると恵まれている

のかもしれないね。今の時代に生まれてよかったね。」

声をかけたが、私たちの会話を黙って聞いていた館長さん

の曇った表情が、私の心に引っかかっていた。

帰りがけに、館長さんが「幸手市史」の資料を見せてくれた。

「当時の子どもたちは戦争中でも懸命に生きていたんですよ。」

そう言って館長さんは、何枚か写真を見せてくれた。

「当時の子どもたちが、昼間に楽しそうに遊んでいる写真です。みんなの顔がとても明るくていいでしょう。」

その笑顔は本当に楽しそうで、みんなで相撲をとったり、仲良く一冊の本を読んだりしている写真であった。館



長さんは続けて話してくれた。

「今がどれだけ恵まれているか、ということを考えるより、昔の子どもの生き方を肌で感じることで、きっとこれからの生き方も変わってくると思いますよ。」

「昔の子どもの生き方ですか。」

「食べ物や労働でどんなに苦勞しても、自分の生まれた家に帰れると信じて、懸命に生きてきた子どもたち。防空壕に避難したり、爆弾の落下音に驚かされたりしながらもお互いをいたわり合っていた子どもたち。自分の親が戦死したと知らされて、これからどうやって生きていけばいいのか考えられなくなった子どもたち。そういう状況の子どもたちも前向きに力強く一生懸命生きていたのですよね……。そして表情がこんなに明るい。」

館長さんは一通の手紙も見せてくれた。

そこには一人の少女が東京大空襲で家を焼かれ、別の場所に疎開した母親に送った手紙であった。子どもたちが戦時中つらい精神状態の中で、全力で困難に立ち向かい、生活していた中で、それでも母親を気遣い、自分もがんばっているから、お母さんもそちらでお仕事にはげんでくださいと、自分の決意を述べる心情が書かれていた。私は当時の女の子の思いを目の当たりにし、不思議と胸が熱くなってくるのを感じた。

（そんな苦しい状況の中でも、負けることなく前向きに強く生きていたんだ……。）

「百合ちゃん、帰るよ。」



私は、咲ちゃんの声ではっと我に返った。

すると、館長さんが私たちの方を見て微笑んでいた。

その笑顔が先ほど見せてもらった写真と重なって見えた。

「今日は幸手で戦争中の子ども生き方について考えることができ、本当によかったです。私は、その子どもたちの思いを伝えるために、平和の作文を書いてみようと思います。」

私たちは館長さんにお礼を言って、郷土資料館を後にした。

川沿いの道を家路に向かう。私の目には一面の田んぼが映る。

(戦争中の子どもたちも、この同じ景色を見ていたのかも。

生きるって何だろう。)

目の前に広がるあかね色に染まった田園風景を見つめながら、

私はもう一度写真の子どもたちの笑顔を思い出した。そして家

に向かって、力強く自転車をこぎ始めた。





疎開先での学童の様子1



疎開先での学童の様子2

(注釈) 学童疎開

戦争の戦局の悪化に伴い、戦禍を避けるために、学童を地方都市や農村に集団的または個人的に移住させたことを言います。疎開学童たちは、初めは疎開先の人々の親切もあって、親元を離れた寂しさを忘れ心とむ日々もあったが、やがて食糧事情が悪化し、空腹や寒さ、ノミ、シラミに耐える生活が続いたとされています。

